

彙 報

國史研究室近況

當な所から、爾後依然として適當な文獻に乏しい今日、この譯書の公刊は時期を失した嫌はあるが、我が學界に於いて歡迎せらる可きであらう。それに加へるに本書の譯文は近年續出する一部考古學書の譯本に較べると非常に念が入れてあるばかりでなく、出版後可なりの年月を経たと云ふ考慮からでもあらうが、譯註なり、參考書目の追加を以てすると云ふ良心的なものたる點を多とす可きである。印刷も時節柄よく出来てゐて、圖版の如きも網版の複寫ながら大體分明するのは欣ばしい。たゞ折角加へられた譯註であるが、執筆者の關係から不得止とするも、朝鮮に關する知見が大部分を占めて、それ等が細かな點に互つてゐるにもかゝらず、一層大切な露西亞本國なり支那本土の所見に於いて缺けた所の目立てゐるのは、よしやこれを同文物の東方波及と云ふ日本の學界への關係に結びつけて考へるとしても、極めて不充分なもので、この程度のものならば附加せない方が寧ろ原著者に對して敬意を表する途ではなかつたかと思はれるのである。

(A5版、本文四二〇頁、圖版三二頁、地圖一枚、桑名文星堂刊、賣價十三圓四十三錢) (以上梅原末治)

讀史會歡迎會 新入學生並びに生徒の歡迎會は五月二十一日午後、市内武者小路千家の弘道庵に催された。西田教授はじめ諸教官、研究室職員、學生生徒の會する者約卅名、宇治に勤勞出動中の學生らも折柄の休日を利して參集、稀に見る盛會であつた。會は諸教官の談話を以てははじめられ、西田教授は特に南方に關する資料を展示して、この方面に於ける先人の活動を語られたのは極めて感銘深いものがあつた。又新一回生らは近く勤勞出動すべく豫定されてゐるので、この壯行の意も盛られ、學徒と勤勞との問題も連りに論ぜられて時局下逞しい青年の意氣を開陳して力強い限りであつた。

講演 宇治出講、洛南宇治方面に勤勞動員中の本學文・經兩學部學生の爲めに隨時文化講演が行はれ、國史研究室よりは五月八日夜西田教授の南方諸地域に於ける中世以來邦人活動の歴史的な展開に關し、又五月十七日夜には東伏見講師は宇治・醍醐附近を中心とする造形美術に就いて講演を行つた。學園を離れて敢闘する學生は兩夜共晝の疲れを忘れて、偉大な我が歴史的な文化活動に觸れ、感銘深いものがあつた。

月曜講義、學生課主催の月曜講義は時局下の要望に對へて鎌倉

時代の文化を主題として、廣く講師を選んで長期連續の講座を開いたが、西田教授はその第一講として六月四・五兩夜に互り「鎌倉時代の歴史的意義」と題する講演を行ひ、警報速りに發せられる折柄にも拘らず法經第四教室滿堂にあふるゝばかりの學内外聴衆を魅了した。又中村助教は六月十九・二十日兩日に「弘安戰勝とその後」と題し、藤助教は七月二・三兩日に「武家社會の道義性」に就いて、それ〴〵蘊蓄を傾けられた。

## 談話會記事

**見學** 河内吉村家 五月五日大阪府南河内郡高鷲村烏峯なる舊家吉村要次郎の邸宅を見學した。同家は戰國の末に政屋と稱し、徳川時代には永く大庄屋の格式を保ち、連綿と近郷に勢威を張つてゐた。その廣大な屋敷内は戰國末に兵火に罹つて以來の規模を有するものと認定され、爾後の建増に係る部分を除き大和棟の主屋、それに接續する書院ならびに長屋門等は先頃國寶に指定され、民家建築の典型と考へられてゐる。詳しく説くことは他に譲るが、書院の結構、主屋の規模何れも元祿の古圖と一致してゐて、乏しいこの種の史料として貴重な一例であつた。當日參加者は西田教授、東伏見講師以下教官學生ら十三名、加ふるに第一回卒業生松本茂平氏は同村に居住し、現に吉村邸保存會を指導してをられるので、何かと斡旋され且つ西田教授との回舊談には興味深いものがあつた。

**葵祭** 五月十五日は賀茂上下社の官祭葵祭の日である。本年

も居祭にて華かな行列は行はれなかつたが、社頭の儀を拜觀すべく、藤助教以下研究室職員は細雨新緑の上社に參詣神事を拜した。終つて社人の好意により神殿大床に參入し、神祕の古式を傳へる神饌を拜見、夥しい御供に就いて傳承を調査した。

**大覺寺** 五月二十二日午後には赤松講師指導の課外講義として洛西嵯峨の大覺寺を見學した。後宇多天皇の御再興以來所謂大覺寺流の由緒深く、數々の宸翰・宸影を傳藏し且つ聖蹟に富んでゐる。それらの宸翰を拜し、後宇多天皇御求法の熱心に觸れ奉ることは洵に畏多い次第であつた。

**當麻寺** 六月十日には奈良縣北葛城郡當麻村の古刹當麻寺を訪れた。松村實照氏の東道にて先づ中坊に入り、書院、庭園を一覽、東塔の雄大莊麗な奈良朝の手法を見、金堂（建物は以下すべて鎌倉時代）にて本尊彌勒菩薩坐像をはじめ多くの奈良時代の佛像を拜す。次いで本堂と稱する曼荼羅堂にて中將姫の蓮絲を以つて織なしたと傳へる淨土曼荼羅の寫し、世に文龜曼荼羅と稱する大幅を拜する。又講堂にてはこゝにも多くの優秀な佛像を拜し、限りなき法悦と豊かな史料とにひたることが出来た。

**久米田寺** 六月卅日大阪府泉南の古刹久米田寺の見學を行った。同寺は隆池院と稱して行基菩薩開基四十九院の一と傳へ、門前の池塘は久米田池と言ひ、これも亦行基の手に開かれたと傳へ周圍約一里繚漫たる水を湛えて、折柄挿秧の時に當つて力強い感と與へてゐる。一行は西田教授、東伏見講師以下教官學生約十名、森暢氏の案内により、同寺花嚴院に於いて國寶楠家文書等、又天平

勝寶元年勘録の流記坪付帳（寫本）等を披見した。一は以つて草創に規模を偲ぶべく、他は一聯の文書書を通じて南朝忠臣の活動を祭するに足る。のみならず最近森氏によつて再發見された金胎兩部曼荼羅、明惠上人像はじめ幾多の書畫を拜見し、又鎌倉末以來同寺の檀那たる安東氏關係の諸史料を得て史心を富ますことが出來たのは愉快であつた。嘯時名殘多く辭去して更に泉北取石村綾井の名刹專稱寺を訪ねる。同學井川定慶師の住寺である。こゝにて長慶天皇繪冒瀆寺大雄寺の古瓦を見、近世禁裏の御大工として中井氏配下に活動した高石町の奥野家らの記録等を披見、夜更くるのを覺えなかつた。

**談話會** 教官職員等の研究を相互に助成し併せて各自の意見を交換するため、新たに談話會を設け、毎週水曜日の午後半日に會同し、一人づゝ報告することになつた。開始以來の話者並びに話題は次の如くである。

- 六月廿日 島津齊彬の事蹟 小倉親雄氏
  - 六月廿七日 肇國の聖蹟 西田 教授
  - 七月四日 茶 室 堀内他次郎氏
  - 七月十一日 大名貸するねおひの分限者 石田一良氏
  - 月十八七日 洋人の日本研究と國史學の發達 西田 教授
  - 七月廿五日 耳 塞 餅 平山敏治郎氏
- 計報 左記の方々の計報に接しました。謹んで哀悼の意を表します。
- 加藤竹男氏（國史研究室囑託、神宮司廳勤務）

伊藤只人氏（昭和五年卒、弘前高等學校教授）

勝谷 透氏（昭和八年卒、長野工業專門學校教授）

稻葉慶信氏（昭和十一年卒、元助手、大阪府豊中高等女學校教諭） 昭和二十年二月 戰死

定 豐 穗氏（昭和十七年九月卒、） 戰病死

**西洋史讀書會**

**例會暨新專攻生歡迎會** 西洋史新專攻生諸君の歡迎會を兼ね、昭和二十年度第一回讀書會例會を五月十四日午前十一時半より陣列館貴賓室にて開催。原教授、井上助教授以下十二名出席し晝食を共にして後、前川講師の講演を聴講して散會。

一、フランス革命戰爭に就いて 前川貞次郎氏

**第二回例會** 例會を六月十八日午後一時より原教授室にて開催、原教授、井上助教授以下八名出席。

一、エドワード一世のブリテン 植村雅彦氏

島統一に就いて

**地理學談話會**

**地理學專攻新入生歡迎會** 昭和二十年五月十九日（土）午後四時より近衛通電停まへの京大學生集會所食堂において開催。新入一同生は本科三名、選科四名で、他に勤勞動員の關係から今回地理

學專攻に決定したそれ以前の本科生二名、總計九名である。この日、小牧教授、野間講師をはじめ地理學研究室諸員の参加を見て出席者十六名。夕食を共にしつゝなごやかな歡談のうちに一夕を過ごしたが、特に「同じ釜の御飯を頂くことの意義」を説かれた小牧教授のお話は感銘深かつた。

### 考古學教室近況

考古學談話會 新入學生の歡迎と近く入替する學生横山浩一君の壯行會を兼ねて、五月十二日(土)午後三時より考古學教室にて開催。梅原教授、村田・東伏見兩講師以下教室關係者九名出席、先づ新入の藤好氏の自己紹介あり、梅原教授より出陣中の教室關係者の近況披露の後、ベトリー教授の學風に就いての談話などがあつて、茶菓を喫し五時過ぎに和氣に満ちた會を閉じた。

伊賀古墳の調査 六月二日(土)より三日(日)に互り梅原教授は同地村治圓治郎氏の東道に依つて、名賀郡美波多村に散在する古墳群と阿山郡佐那具にある御墓山古墳等を調査した。川勝政太郎氏同道。前者では數基ある周濠の宏莊な前方後圓墳がそれ／＼形の上に差異を示し、而もよく墳形を保存する點で興味を惹いた。依つてこれ等は近くその實測を行ふ豫定である。

唐鏡大觀の出版 豫て印刷中であつた本教室考古學資料叢刊の第三『唐鏡大觀』は時局の影響を受けて、著しく出版が遅延してゐたが、最近美術書院から公刊を見た。和紙刷圖版二冊、解説一冊で、後者には梅原教授の「唐鏡概觀」が収録されてある。三百

部の限定出版で、賣價は百八十圓(外に物品税)である。

故尾崎良博氏南方古美術關係文獻並に資料の受贈 最近本教室は同氏の遺族市氏からこの種の文獻なり資料の寄贈を受けて、目下手續中である。同氏は故本學教授尾崎良純博士の令弟で、大阪の人、本學經濟學部を出てから三井物産に關係して、印度ジャワ等に十年以上も在勤せられてゐた間に、右の方面に深い關心を持ち、關係遺跡の實査と共に文獻の蒐集にもつとめられ、それ等が歸朝後整理せられて、我が國で稀に見る整備なものであつた。本教室には從來その方面の關係資料を殆んど缺如してゐたので、この寄與を受けたことは時局下殊に感謝すべきである。關係文獻は獨・英・蘭其他のもの數百部に上り、印度の部にあつては Fergusson & Burgess: The Cave Temple of India (London, 1880) Ferguson: Tree and Serpent Worship (London, 1873) The Wonders of Flora (London, 1924) 等の古典的なものから最近のものに互り、又ジャワ方面では N. J. Krom: Barabudur, Archaeological Description (The Hague, 1927) をはじめ、同遺跡の基本的な調査文獻を含んで居り、加へるに同氏實査の際撮影せられた多數の寫眞及、遺跡の地圖等は、今後の研究上に基本的な資料を與へる重要なものがある。されば教室では「尾崎良博氏蒐集南方圖文獻」として一括別置保存して、利用の途を講ずる豫定である。

會報

會員動靜

◇入會

京都帝國大學文學部國史研究室

同上

同上

同上

埜上衛

山形友郎

岡田賢一

檜崎彰一

(以上梅原末治紹介)

◇轉居

京都府南桑田郡本町五三

東京都澁谷區穩田町三丁目七九

兵庫縣武庫郡岡本山村北畑六七四ノ一  
翠嵐房内

三上正利

淺野長武

田中吉太郎

◇死

左の會員諸氏が相ついで逝去せられた譯んで弔意を表する。

昭和十九年十月廿二日

奥村伊九郎氏

稻葉慶信氏

勝谷透氏

伊藤只人氏

加藤竹男氏  
定 豐 穗氏  
小葉田 亮氏  
文學博士 瀧 精 一氏